

「かわいそうな子」じゃありません

市内中学校 二年

私の家は、私が幼い時に父が亡くなり、いわゆる母子家庭だった。そのためか、かわいそうと言われる事が多かったように思う。

「お父さんおらんっちゃろ。作ってもあげる人おらんやん。かわいそう。」

この言葉は、私が小学一年生の時、通っていた学童での父の日のプレゼント作り中に二年生の男の子に言われた言葉だ。帰宅した私は、父の写真の前に供え、心の中に生きる父に感謝を伝えていた。きっと私の思いは父に届き、喜んでくれていると思う。形は違えど、私のプレゼントと思いは父に渡せた。

「あの子、〇〇さんとこの連れ子やない。大人の事情だけで——。かわいそうに。」

この言葉は、小学五年生の時、下校中に地域の見守り隊の女性二人に言われた言葉だ。私が小学三年生の時、母が再婚し、四年生の進級に合わせて引っ越しをした。転校すぐに臨時休校になった事

もあり不安もあったが、クラスの人とも仲良くなり、楽しく学校に通っていた。家でも、父とはすぐに打ち解け、三人で川の字で寝たりもして、嬉しかった。

「お世話したり我慢したりもしてるんじゃない。どうなのか分からんけど、かわいそう。」この言葉は、私が中学一年生の時、親戚の人が言っていた言葉だ。私が小学六年生の時、妹が生まれた。お世話を手伝ったり、我慢する事もあったが、その事をはるかに越える程嬉しくて、妹が可愛かった。毎日写真を撮って、スマホの容量が足りなくなる程だった。

つまり、私は決して「かわいそうな子」ではない。幼い時に父を亡くし、母子家庭で育った。その後小学三年生で母が再婚、その事による転校、父違いの妹の誕生。世間的に見れば「かわいそうな子」と映るのかもしれない。だが、今私はとても幸せだ。みんなとは違って大切な父が二人もいて、家族想いの面白い母がいて、血の繋がりがなく、五年前に出会った私と実の孫の妹を分け隔てなく可愛がってくれる明るい祖母がいて、二才の

可愛く元気な妹がいる。そして毎日が楽しい。

血の繋がりなんて関係ない。周りが決める事ではない。決めるのは、自分自身だ。

私は、この家族が大好きだ。